日本聖公会 神戸教区報
神のおとずれ
2016年
10月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078（351）5469
FAX 078（382）1095
http://www.nskk.org/kobe/

発行責任者
司祭 芳我秀一

印刷所
文明堂印刷所

「今、あるもので神の栄光を表す」

司祭 マルコ 平野 一郎

私達は人生を送る中で、突然、不幸な出来事が襲ってくることや、また、不慮の事故や災害などに巻き込まれて、時に病気やけがにあって、心が傷つき、絶望してしまうということがあるかと思います。

アメリカ人のハンクスも同じで、彼は鉱山で働いていた時に、両手と両目を一度に失ってしまうということがありました。

彼はとても絶望し、自殺しようと考えましたが、その頃、イェール大学の有名な教授が集会で説教をするということを聞き、彼は集会に参加することにしました。

ハンクスはそこで「それぞれ神様から受ける使命がある」という言葉を聞き、彼はその時、その教授に会って、「私のように手も目もない人間に、どんな使命があるというのですか」とくってかかりました。

すると教授は「あなたにはまだ、口と耳と足があるではないですか。目と手はないけれど、今あるものを持って神様の栄光を表すことができます」と言いました。

その言葉を聞いた彼は希望の光を見出し、すぐにイエス様を受け入れました。

そして神様に、口と耳、足を残してくださったことを感謝し、後にスタンフォード大学に入学し、最善を尽くして学びました。

その後、ハンクスは大学を卒業し、人々に感動を与える名講師となりました。

水野源三さん

「瞬きの詩人」と呼ばれる水野源三さんは、小学4年の時に集団赤痢にかかり、小児麻痺となり、目と耳以外の自由が奪われました。

後に彼は『目と耳』という詩を作っています。

「脳性麻痺のために
すべてを奪われたが
神様が　目と耳だけを
守ってくださった
み言葉を読むために
み言葉を聞くために
み言葉によって
救うために」

この詩の通り、水野源三さんは、なくなったものに目を向けるのではなく、今あるもの、残されたものに目を向けて、感謝の言葉を表したのでした。

失ったものを数えず、あるものを活かす

そこからパラリンピックの国際スポーツ大会の創始者、ルートヴィヒ・グットマン博士は「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に活かせ」と唱えています。

またパナソニック創業者の松下幸之助氏も、「ないものを嘆くな、あるものを活かせ」と語っています。

さらにクリスチャンで、体の不自由なハロルド・ラッセルは「常に、失ったものを数えるのではなく、神様から受けたもの、与えられているものを考えなければなりません。その恵みに感謝しつつ、それを用いる時、より多くの可能性が前に開かれていくのです」と述べています。

聖書においては使徒聖ペテロが足の不自由な男に対して、「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」（使徒言行録3：6）と語っています。

この背景は、ペテロが「金や銀は」持っていないと告白しますが、しかし、「持っているもの」があり、つまり、彼は癒すという賜物があって、それを活かし、足の不自由な男を癒したという話となっています。

このペテロのように、私たちも「持っているもの」、「あるもの」を身の回りで探すと、いっぱいあると言えるのではないでしょうか。

それは聖霊の賜物と言われる「知恵と識別の霊　思慮と勇気の霊　主を知り、畏れ敬う霊、主を畏れ敬う霊に満たされる」（イザヤ書11：2～3）こと、また「目、耳、鼻、口、手、足、知識、才能、経験、友人、仲間、家族な　どなど」です。

このように考えますと、私たちは実はたくさんのものをすでに持っていることに気づかされるのではないでしょうか。

私たちは個人的に、またあるいは教会的にも「ないもの」「失ったもの」だけ数えて、嘆きがちですが、しかし、視点を変えて、今、「あるもの」「持っているもの」「与えられているもの」に目を移し、その恵みに感謝しつつ、それを最大限に活かして、神様の栄光を表していきたいものです。

（倉敷聖クリストファー教会・福山諸聖徒教会牧師）

鳩だより《敬称略》

祝洗礼

6月26日（日）
リディア 桂 香奈
神戸昇天教会

8月21日（日）
トマス 白神 英雄
倉敷聖クリストファー教会

8月26日（金）
キャサリン 堀江 輝美子
神戸聖ミカエル教会

8月27日（土）
トマス 白神 英雄
倉敷聖クリストファー教会

祝堅信

7月31日（日）
アッシジのフランシス 木村 元哉
神戸聖ミカエル教会

祝聖婚

8月20日（土）
バルナバ 岡田 晃典
リディア 桂 香奈
神戸昇天教会

教籍移動

9月4日（日）
野間 恵
野間 嗣恵
日本基督教団 新潟教会より
姫路顕栄教会へ

ご逝去

8月1日（月）
キャサリン 川越 加代
明石聖マリア・マグダレン教会

8月20日（土）
洗礼者ヨハネ 塩崎 利男
明石聖マリア・マグダレン教会

神戸伝道区

◎神戸聖ミカエル教会

日曜学校お楽しみ会を行いました。夕食のカレー作りと貝殻でモビールを制作し、すいか割りや花火をして楽しみました。

広島伝道区

◎日曜学校キャンプ

広島伝道区日曜学校夏キャンプが7月27日（水）～28日（木）、江田島青少年の家で行われ34名が参加。ザリガニ釣りや海ほたるを通して自然に親しみました。

日本聖公会婦人会 第25定期総会

去る6月16日～17日に日本聖公会婦人会第25回（定期）総会が、京都教区主教座聖堂アグネス教会で行われ、全国から代議員、委員、役員、傍聴者（教役者・会員）など106名が出席されました。神戸教区からは、婦人会チャプレンの瀬山会治司祭、深田久美子姉、覚前康子姉、仲田豊実姉、大橋せい子姉の5人が参加しました。

開会礼拝の説教で、沖縄教区の並里輝枝司祭が「分け合うと増える」という歌を歌われたことが印象的でした。総会では、役員会、感謝箱献金事務局（コア）運営委員会、アジア教会婦人会議日本委員会（ACWCJ）など、それぞれから報告がありました。議案も22議案ありましたが、慎重に審議が行われ、可決されました。

2日目の昼から、グリマ・ジャパンの活動についての講演が行われました。その後、次期本部を決める際に、北関東教区が引き受けてくださいました。

初めて総会に参加して、「自分たちの教会婦人会は数人の小さな群れだけれど、こんな沢山の神様を信じる人がいる。」ということを知り、力が与えられました。また、どの教会も高齢化が進み、感謝箱献金や被献日献金の額が支援したい金額よりも少なくなり、そのため、最も助けを必要としている人々に、献金を用いることが困難な状況になってきていることを知りました。

帰宅してから、子どもたちに感謝箱献金を渡し「1日10円ずつ『ありがとう』と言って献金していこうね。」と話しました。高齢化で教会の会計も婦人会も大変ですが「周りに目を向け、無関心にならないようにコツコツと感謝も気持ちを貯めていけたら。」と思いました。

最後に、今回の総会に参加できましたことを、心から感謝致します。

（浜田基督教会 大橋 せい子）

10月の教区関係教役者 逝去記念聖餐式

日時　2016年11月10日（木）午前10:30
場所　神戸聖ミカエル大聖堂
司式　主教　中村　豊
説教　司祭　長田　吉史

＊11月の記念逝去教役者

1日	司祭	レイモンド	クリストファー
3日	司祭		山本 早太
4日	司祭	パウロ	山辺 久吉
8日	宣教師	ヴァイオレット	ハイド
9日	司祭	アンデレ	児玉 正
13日	司祭	モーセ	木俣 茂世
17日	伝道師	ルデヤ	内田 歌子
17日	司祭	ウイリアム	ハンコック
18日	伝道師	チッポラ	末好 信子
19日	司祭	ヨハネ	側垣 正己
20日	司祭	パウロ	秋田 哲三
22日	伝道師		塩原 以満
28日	宣教師	ジャネット	マッキー
30日	宣教師	エイミ	ボサンケット

逝去年月日不明の方々もお祈りします。

ミカエル　岡崎　正　司祭　逝去

今、私たちが神様の御元にお送りしている岡崎　正司祭は８月９日午後２時に入院先の神戸赤十字病院で気胸という病のため逝去されました。82歳でした。

岡崎司祭は高校時代に野球をされて健康には絶対の自信をもっておられました。若い頃は優に80キロは越えていたと思います。ところが40年程前に松山の教会で奉仕されていた頃、胃ガンが見つかり、胃を全部摘出する手術を受けられました。以来、岡崎司祭の体力は徐々に衰えていき体のあちこちが病におかされていきました。奥様の言葉を借りれば晩年の岡崎司祭の体はつぎはぎだらけ。必死で病とたたかう日々が続いたようです。

岡崎司祭が洗礼、堅信を受けキリスト教信仰の道を歩みはじめたのは１９５２年からでした。これには八代斌助主教の影響力が大きかったようです。以来、八代主教をお手本に、すこしでも神様と人の役に立ちたいとの気持ちが日増しに高まり、松蔭短大、英国のケラムで神学を学び本格的に聖職への道の歩みを開始されました。

そのような岡崎司祭が常に神様とともに歩まれた道をしのびつつ、二つのことを申し上げたいと思います。

一つは、その歩みの日々は文字通り、『皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。』（マタイ20：27-28）との主イエスのお言葉に忠実そのものでした。

70代後半から80代にはいると急に気力、体力に衰えを感じます。わたしは、退職後10年近く淡路島の洲本の教会で月に２度だけですが、礼拝奉仕をしてきました。それに限界をおぼえて今年４月から完全に身を引きました。

ところが、そんな私とは違い、岡崎司祭はどんな人ともやさしく、そして、等しく交わることの出来る人でした。そんな司祭との思い出を大切に、そして、それを折にふれ日々の生活に生かす日々を送りたいものです。

（司祭　オーガスチン　西川　正文　葬送式説教抜粋）

かあったらそれは殉教というもの。こんな名誉なことはない。そう思っていた岡崎司祭は文字通り全身全霊でもって聖職道を最後まで歩まれました。私たちの日々の歩みの中心は「主と共に」というものですが、ともすれば自己中心になり、このことを忘れがちになります。そんな私たちに「それは間違っている、しっかりせい。」とばかりにこのことを岡崎司祭はその生涯を通じて私たちに教えてくれました。

次に申し上げたいことは、岡崎司祭は実に几帳面にこまかく正確に物事の処理が出来る人でした。八代学院高等学校（現在の神戸国際大附属高校）に勤務中、初め岡崎司祭は教務主任をしておりました。その頃の岡崎司祭は執事試験とかち合っていました。教務主任としての大事な仕事の一つは時間割編成です。岡崎司祭は慣れないこの仕事に夜遅くまで一生懸命取り組んでおりました。私はその時、「かわるから試験の準備をしたら」と何度か申し出ましたが、責任感の強い彼は「いいよ、これは俺の仕事だから」といってがんとして手放そうとはしませんでした。自分のことを犠牲にして迄の岡崎司祭の頑張りで見事に時間割編成がなされ学校は無事スタートすることができたのです。

何よりも与えられた仕事を優先する。私たちはどうしても先ず自分のことを優先しがちです。そうなれば沢山の犠牲者がでます。そのことを教えてくれたのが岡崎司祭の生涯の歩みでした。その事を思い出す時、私たち主を救い主と信ずる者に「祈りと御言葉の奉仕に専念しよう」（使徒言行録６：４）との聖書のみ言葉が響きます。

岡崎正司祭はどんな人ともやさしく、そして、等しく交わることの出来る人でした。そんな司祭との思い出を大切に、そして、それを折にふれ日々の生活に生かす日々を送りたいものです。

（司祭　オーガスチン　西川　正文　葬送式説教抜粋）

召命黙想会

今年の召命黙想会は、聖公会神学院の校長である佐々木道人司祭を講師にお招きして、広島のイエズス会聖ヨハネ修道院で行われた。２泊３日の日程で、佐々木司祭のこれまでの歩みを通しての講話が行われ、参加者一人一人が召命について黙想する時間を与えられたのはもちろんのこと、私たちが「今」を生きていることについて思い巡らせることのできた一時となった。

佐々木司祭は「召命とは、人任せの人生の裏側にいる神様に身を委ねること。」と話をされて黙想会がスタートした。したがって私は、神様に身を委ねるとはどういうことかを考えながら黙想会を過ごしたのである。講話の中で印象的だったのは、佐々木司祭が怒りや悲しみ、苦しみを感じるような経験を通して、神様から「恵み」が与えられていることや、だれかに「してもらっていた」ことに気づくことの大切さを学んだと話されていたことだ。神様に身を委ねるとは、良い時も悪い時も神様との出会いを求めていくことなのだと考えられた時間であった。また、「今」という瞬間を生きることの尊さを語られている姿も目に焼き付いている。それは、固定化された24時間で表される「時」ではなく、神の国で大切な人と再会できるという不確かな「時」を心から求めるとき、「今」という瞬間を生き抜くことができると教えられた気がしたのである。

今年の黙想会は、私に神様との繋がりを求めながら生きることを考えさせてくれる時間となった。

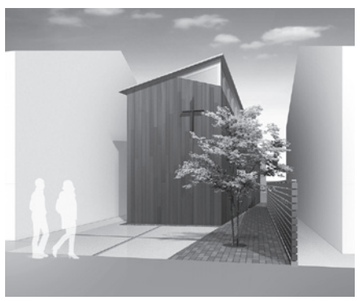
（教区神学生　永野　拓也）

教会建築シリーズ②

広瀬基督教会　編

７月10日、広瀬基督教会の聖別解除の祈りが行われ、８月からは解体作業が始まり、９月15日は、新礼拝堂の起工式が行われる予定となっております。

戦国乱世の時代、陰陽11ケ国を領した尼子氏の居城であった月山富田城は、日本屈指の山城として有名を馳せており、この山陰の鎌倉と謳われるこの広瀬の街にイエス・キリストの福音の種が蒔かれたのが１８９２年（明治25年）のことでありました。バックストン司祭など多くの聖職者の教導に始まり、爾来１３０年有余の間に１８０人に近い信徒が誕生し、広瀬の地から全国各地へ巣立って行きました。



礼拝堂は１９２７年（昭和２年）、広瀬大火により焼失しましたが、同年、現在の教会堂を新築し、その後、度重なる修復を経て今日に至っておりますが、老朽化が進み、観るも空しい状態を呈しております。

現在、教会を保守しようとする信徒は少数ですが、先人達が灯したこの信仰の火を絶やすわけにはゆかず、ここにイエス・キリストの体である教会堂の新築を決断いたしました。

今後、皆様方にお願いさせていただく建築献金と併せ、自作の絵画作品、お家に埃を被った絵画、聖画などをご寄贈いただければ、展示させていただきたいと考えています。広瀬基督教会の新礼拝堂は、多くの人に気安く訪ねていただける開かれた教会として「心が和む　絵のある教会」を目指し、皆さまのご理解とご協力、神様のご加護を衷心より願っております。

（広瀬基督教会信徒　アブラハム　吉村　信）

～ 絵画の受け入れ先 ～

〒692-0404
島根県安来市広瀬町広瀬 882 番地
吉村信方　広瀬基督教会
TEL 0854-32-2653

信徒神学塾 出前講座報告

２年越しの企画であった信徒神学塾～出前講座～が、米子・岡山を会場に開催されました。講師は植松　功さん。テーマは「神さまの息のかかった生活～テゼの歌と黙想の祈りのひととき～」でした。

【米子～山陰伝道区～集会】

７月17日（日）信徒神学塾出前講座が当教会で開校されました。５・６年前運営委員（藤井司祭）からギターとお話で素晴らしい宣教活動をされる「植松　功」兄のことを伺い、私自身米子での開催を温めておりましたところ、信徒神学塾委員会の粋な計らいで実現の運びとなりました。主日の奨励の中でもギターとお話しで心癒されるひと時を過ごし、午後、山陰伝道区からの参加者50数名の中で、隣の良善幼稚園のある先生は「涙がとまらなかった」と。植松兄は、主は「マルタを、やさしく、やさしく、お呼びになった」「あなたも呼んでおられる」という慈愛に満ちたイエス様のみ言葉をお聴きし勇気と希望を与えてくださいました。また、「キリスト教とは…イエス様が一緒、ひとりぼっちではない」という一言が福音そのものであると。私共、地方教会にあっては、このような素晴らしいお話を聴く機会が少なく、今後もこのような出前講座を教区の隅々までゆきわたらせていただきたくお願いし、宣教１４０年の記念する年にあたり信徒神学塾のお働きを通して教区内の信仰を深められることを祈りながら…。在主

（米子聖二コラス教会信徒　垰田　光俊）

【岡山～瀬戸内伝道区～集会】

７月18日（海の日）岡山聖オーガスチン教会を会場に、「テゼの祈り」で有名な植松功さんを講師にお招きして、祈りと賛美と黙想のひと時を約50名の参加者と共に持つことが出来ました。瀬戸内伝道区だけでなく、他伝道区からも多くの信者さんが、テゼの祈りにお越しくだり、参加者一同、霊的な癒しを豊かに与えられました。また前夕は、植松さんを囲んで、とくに仕事や育児で忙しく、なかなか教会に来ることのできない30代のご夫婦と子供たち約20名で、楽しくＢＢＱをしました。

２日間、快く会場をお貸しくださり、多大なご協力をしてくださいました上原司祭ご夫妻をはじめ、岡山の教会の皆様に心より御礼を申し上げます。

（神学塾運営委員　司祭 バシル 八代 智）

第53回 中高生大会

８月15日～18日に、第53回神戸教区中高生大会が徳島県那賀郡鷲敷野外活動センターにて行われました。今年も70名を超える方々が参加してくださり、天候にも恵まれ無事に行うことができました。

１日目はＢＢＱを行い、だんだん皆の緊張がほぐれ、徳島の産物やお肉を笑顔で頬張る子がたくさん見られました。２日目は、講話の後に今年初の試みである「インタラクション」を行いました。分かれたグループに教役者さんに入っていただき、講話でインプットした事をより深めるためアウトプットする場を作り、今年のテーマである「らしさ」について話してもらいました。自分らしさ、相手らしさを見つけ、認め合う。という目標が達成出来たと思います。お昼には、徳島の産物半田そうめんをお腹一杯食べ、学年別ディスカッションの後は球技大会を行い、班で協力し合いながら全力で取り組み、仲良くなることができました。３日目は、朝から大運動会を行い、広い体育館で思いっきり身体を使い動きました。テゼでは、司式をＣＳにお願いし、熊本震災などの体験談をもとに「感謝」「願い」について考えました。夜には徳島の大自然に囲まれ、虫の音鳥の音と共にキャンプファイアーを囲み、最後のプログラムを終えました。４日目には皆勤賞の５人をはじめみんなが別れを惜しみ、来年の再会を約束しました。

地元徳島を感じ、頭を使い、身体を使う。これがわたし「らしさ」の出た大会だったと思います。しかし、わたし１人の力ではありません。役員それぞれの「らしさ」が集まって出来た大会でもあります。

最後に、１年間支えてくださったチャプレン、チャプレン補をはじめ、ＣＳ、役員、参加者、本部であったテモテ教会、その他ご協力頂いた皆様本当にありがとうございました。全てに感謝します。この53回大会が未来継承へ向けての一歩となり、これからも受け継がれていく事を願っています。

（大会長 松崎 二千奈）

九州地震 ボランティア報告

熊本聖三一 ボランティアセンター

6月28日～7月15日

私は６月28日から７月15日の約三週間に渡って、ボランティアセンターに滞在させていただきました。この時期の主な作業内容は、地震によって落下した瓦の搬出、全壊したお寺の瓦礫撤去作業の手伝い、納屋の下に埋まった農耕機の掘り出し、引っ越し手伝い、コンクリートブロック塀の解体、冷えた飲み物配りなどでした。夏前でも熊本の気温は非常に高く、作業中、熱中症になる方が何人かおられたため、暑さ対策と水分補給を毎日しっかり行うことを意識し、作業中もボランティアそれぞれで声を掛け合い、お互いの体調を気遣うようになりました。

私の滞在中は、梅雨時期ということもあり雨の日が多かったです。熊本聖三一ボランティアセンターには道具倉庫などはないため、雨が降ると外に出している作業道具を一旦屋内に退避しなければなりません。また、天候が悪く屋外での作業が困難な時は熊本聖三一教会周辺の環境整備や作業道具の整理、被災地探索など、作業を選びながら過ごすこともありました。

今回の地震で被害の一番大きかった、上益城郡益城町は震災から約３か月が経過していましたが、倒壊した家屋のほとんどが未だに手付かずの状態で放置されています。被災者の方からは、倒壊による隣家や道路への二次被害を危惧する声も聞かれました。私が熊本を離れる頃には晴れの日が多くなり、少しずつ行政の依頼した業者も入りはじめ、瓦礫撤去や仮設住宅の建設を行なう場所も増えてきました。また、仮設住宅への入居が決まったという話も何人かの方からお聞きすることができました。しかし、まだ復興の目処はついておらず、引き続きボランティアとができました。

7月18日～8月1日

（聖職候補生 遠藤洋介 記）

７月18日に梅雨が明け、熊本の夏が到来しました。この時期から、被災地である益城町では、行政から委託された業者によって倒壊した家の撤去作業が始まりました。しかし、ある被災者の方から「役場の委託業者に依頼しても、自分の家で作業をしてもらうまでに２年はかかる」という話を聞きました。また、行政の委託業者ではなく、自分で探し当てた業者に依頼すると、通常の倍以上の費用がかかる、ということです。

熊本聖三一ボランティアセンターでは、私の滞在中に被災したご自宅から出た瓦礫を、コンクリート、モルタル、石膏、木材などに仕分けして、ゴミ置き場やゴミ処理状へ運搬することが主な作業でした。夏到来ということもあり、仕分け作業の時は、炎天下の中が多く、長袖を着て作業をしていましたが、それでも日焼けするほどでした。その一方で、７月末には、益城町を中心に、これまでにボランティアセンターに依頼をしてくださった方々のご自宅を訪問することで、その後の生活に力になれることはないか、と尋ねたり、道行く人に声をかけることで、日々変わる被災地の状況を調査しました。その甲斐も有り、新しい出会いの機会が多く与えられ、その場その場で、ボランティアそれぞれの賜物が活かされることとなりました。この巡回をボランティア・センターでは「彷徨う（さまよう）お助け隊」と名付けられ、７月末のメイン作業となりました。

（執事 浪花 朋久 記）

2016年 沖縄週間

６月24日から27日まで、沖縄週間の旅に参加させて頂きました。これまで何度か個人的に沖縄を訪れていたのですが、聖公会に関わる１人として参加した沖縄の旅は少し新鮮で、新たに学び感じた事が多くありました。

高校の授業で、在日米軍基地問題の話を聞きました。第二次世界大戦が終わって今年で71年。沖縄には、未だに数多くの米軍基地が存在しています。戦闘機の騒音、米兵による暴行事件、米軍基地がフェンスを挟んですぐ隣に存在しているという事実は様々な弊害を巻き起こしています。更に、高江と辺野古という場所では、今まさに新しい基地が作られようとしているのです。米軍基地を巡る、市民と国との衝突は、僕が生まれる前から続いています。沖縄の米軍基地問題を知れば知るほど、その基地や弊害を沖縄に押し付けているのは「本土」に住む自分自身だという事を思い知り、やりきれない気持ちになりました。

この国や世界に散らばる「問題」とされている事を見渡してみると、そこにはいつだって、薄っぺらな大義名分の為に誰かが犠牲にならされる社会構造が存在します。「沖縄に新たな米軍基地を作ります。森を切り崩し、海を埋めて、自然は破壊しますが。様々な弊害も巻き起こしますが。しょうがないじゃないですか、日本の平和と安全の為なんだから」と。

誰かが何かが犠牲となり、その犠牲の上で誰かがほくそ笑む社会構造。そして、ほとんどの人はそんな犠牲が生み出されている事すら知らされず、気付いたら犠牲を作り出す事に無言の加担をしていく。問われているのはいつだって自分自身、どう生きるのか。そう遠くない未来、次の世代や社会に胸を張れる様な自分でありたい、と思います。

（姫路顕栄教会信徒　野間　陸）

2016年 広島平和礼拝

今年も８月５日～６日まで、広島平和礼拝が広島復活教会を会場に行われました。今年も聖公会関係学校から中高生・大学生はじめ、神戸教区内外からの参加者を合わせ、総勢約150名の方々が、参加してくださいました。

８月５日は、「碑巡り」からプログラムが始まりました。「入門編」では、広島平和公園内にある原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑などを５つのグループに分かれて巡りました。この「入門編」には、特に次世代を担う中高生・大学生の参加者が多く、深い学びの時を経験されたと思います。「大本営編」では、復活教会近くの広島逓信病院の敷地内にある「旧外来棟被爆資料室」、広島城にある「中国軍管区司令部跡」などを巡りました。

被爆証言：近藤紘子さん

昼食後、教会礼拝堂で「被爆証言」が行われました。今年の講師は、近藤紘子さん。近藤さんのお父様は、原爆が投下された当時、復活教会近くにある日本基督教団流川教会の牧師された方で、原爆が投下された時、近藤さんとお父様は、流川教会で被爆されたということでした。当時、近藤さんは、両親や大切な人々を苦しめ、広島に原爆を投下した爆撃機エノラ・ゲイの操縦士を「許せない」という強い想いを持っていました。その後、近藤さんが、アメリカ留学の際にエノラ・ゲイの副操縦士と会う機会があったというのです。しかし、近藤さんは、副操縦士を見たとき「この人も人間なのだ」と思ったことで「恨むべきは人間では無く戦争だ」と、思い始めたそうです。この近藤さんの話から、私たちは原爆における「怒り」と「赦し」を垣間見ることができました。

８月６日（土）。朝８時から広島復活教会で中村豊神戸教区主教をはじめ、三鍋裕横浜教区主教、武藤謙一九州教区主教、上原榮正沖縄教区主教によって、広島原爆逝去者記念聖餐式が執り行われました。礼拝中、原爆が投下された８時15分からの１分間、黙祷がささげられました。

71年前に起こった悲劇が、二度と繰り返されてはいけない、そしてこの世界にキリストの平和が広がることを祈りつつ、今年の広島平和礼拝を過ごしました。

（広島平和礼拝実行委員
執事　浪花 朋久）

東アジア青年大会（CCEA）

私は、７月27日から８月１日に開催されたCCEAの青年フォーラム（クアラルンプール）に参加した。このフォーラムには東アジアの様々な国や地域から、100人以上の青年が集い、「宣教の５指標」の講義を中心に、神学校への訪問や主日礼拝の出席などを行った。

私がフォーラムで感じたことは、聖公会の奥深さであった。例えば、マレーシアの教会では、オルガンの代わりにドラムやギターで伴奏を行っていた。また、フィリピンでは森林伐採による環境破壊に対して、教会が植林事業を展開しているという報告があり、ミャンマーの参加者からはクリスチャンが少数者として生きていくことの困難さを教えられた。同じ聖公会にも関わらず、国や地域の歴史や置かれた状況によって、日本では想像も付かない〝教会〟が形成され、人々が信仰を守っていることを知ることができた。一方で、私はフォーラムの中である講師の方が「私たちは聖公会という１つの大きな家族の一員なのです。」と話していたことが印象に残っている。

フォーラムで多くのことを語り合った参加者の大半とは、再会することはないかもしれない。けれど、私は代祷の中で香港の教会が出てくれれば、香港の参加者たちを思い浮かべながら祈ることができるだろう。そして、彼らも私や日本からの参加者を思い起こし祈ってくれるのだろう。豊かな違いを持つ東アジアの教会の仲間たちと、これからも繋がり合っていきたいと強く感じている。

（教区神学生　永野　拓也）

宣教140周年記念「集まれ、語れ、青年たち！」

８月11日に宣教140周年記念イベントとして、「集まれ、語れ、青年たち！」と題した今後の青年活動や青年交流会について考えるひとときを持ちました。まず、マレーシアで行われた東アジア青年大会（CCEA）の報告を永野拓也神学生と私で行い、中村主教様に青年活動についてのお話をしていただきました。その後はワークシートを使って「なぜ教会に行くのか、行かないのか」、「教会での自分の役割は何なのか」など自分の教会生活を振り返ったり、「これから青年会でどのような活動をしていきたいか」、「どうしたら青年が増えるのか」などをグループに分かれて話し合いました。

神戸教区は他教区に比べて青年も多く、青年交流会や中高生大会、また教区の行事などで活動できる機会が多いのが魅力だと思います。しかし、行事に集まるメンバーはいつも同じ、大学を卒業して社会人になると自然と教会から離れて行ってしまう青年も少なくありません。このような中で私たち青年はどのように活動をしていくべきなのでしょうか。

新しい青年に来てもらえる機会を作ったり、今までにはなかったようなイベントの企画、また青年で地方の教会に行き一緒に礼拝に参加するなど様々な提案がありました。これらが実現できれば、さらに活気のある青年交流会になるのではないかと思います。140周年を迎える今年は、神戸教区の青年がより活動の場を広げ、積極的に活動していくためのきっかけとなる大切な１年になると思います。どうぞこれからも教区の青年のためにお祈りいただければ幸いです。

（徳島インマヌエル教会信徒
小林 真綾）